

< 第 2 回政策研究会勉強会（有識者講演会）資料 >

岐阜県の世帯動向等について

平成 2 3 年 6 月 1 4 日

岐阜県政策研究会

人口動向研究部会

本レポートは、「岐阜県政策研究会人口動向研究部会」における研究の途中経過として、これまでの傾向をまとめたものであり、県としての公式な考え方を示したものではありません。

本日の報告

- ・岐阜県の世帯動向の概略を振り返る
- ・世帯の変化にまつわる地域の生活実感
- ・今後の研究の取り組みについて

世帯

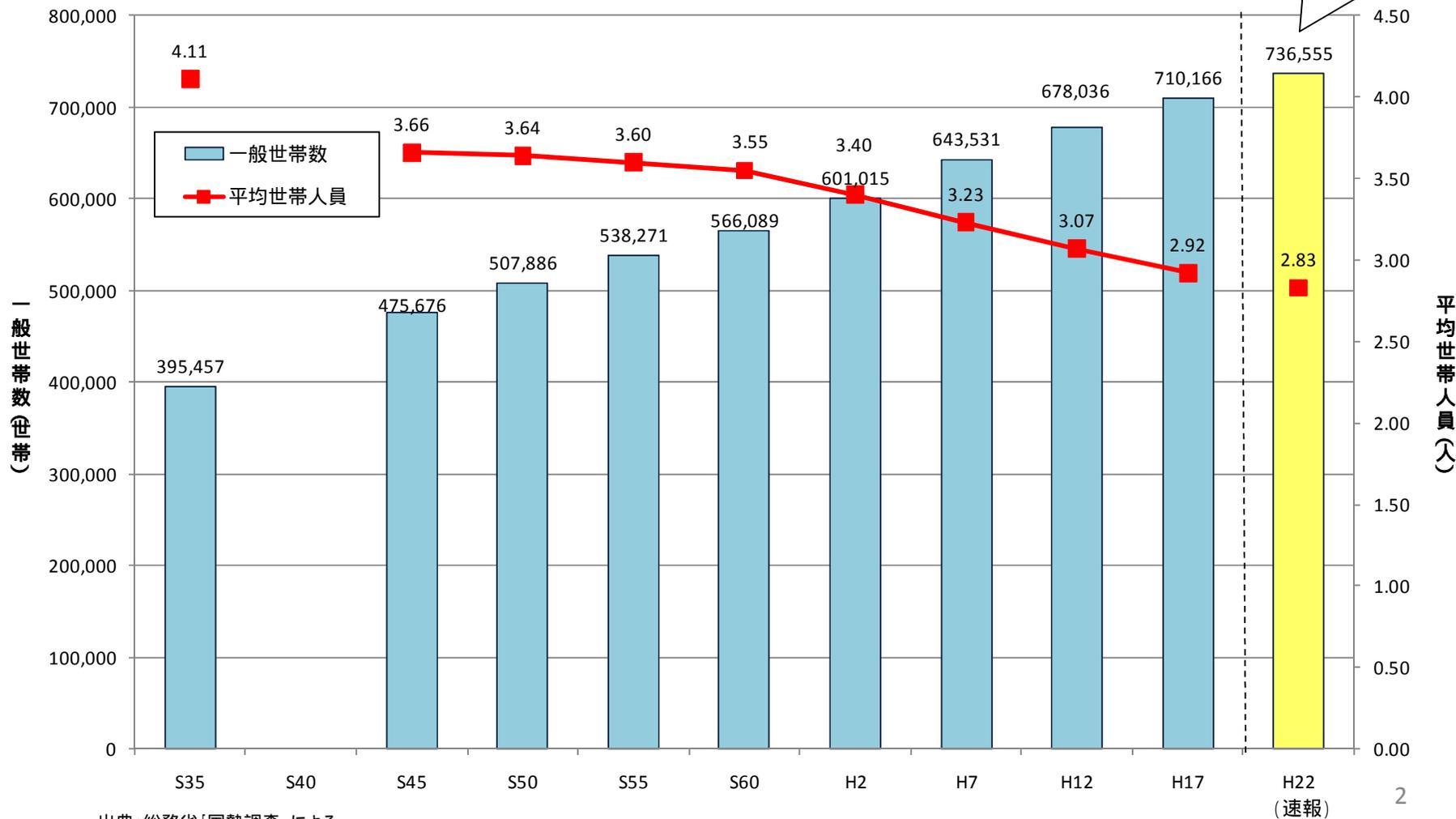
- ・住居と生計を共にしている人々の集まり
又は一戸を構えて住んでいる単身者
(国勢調査の定義)

世帯数は一貫して増加を続け、73万世帯を超えた

～ 1世帯当たり人員は3人を割り込み、小家族化が進む～

岐阜県の一般世帯数と平均世帯人員の推移

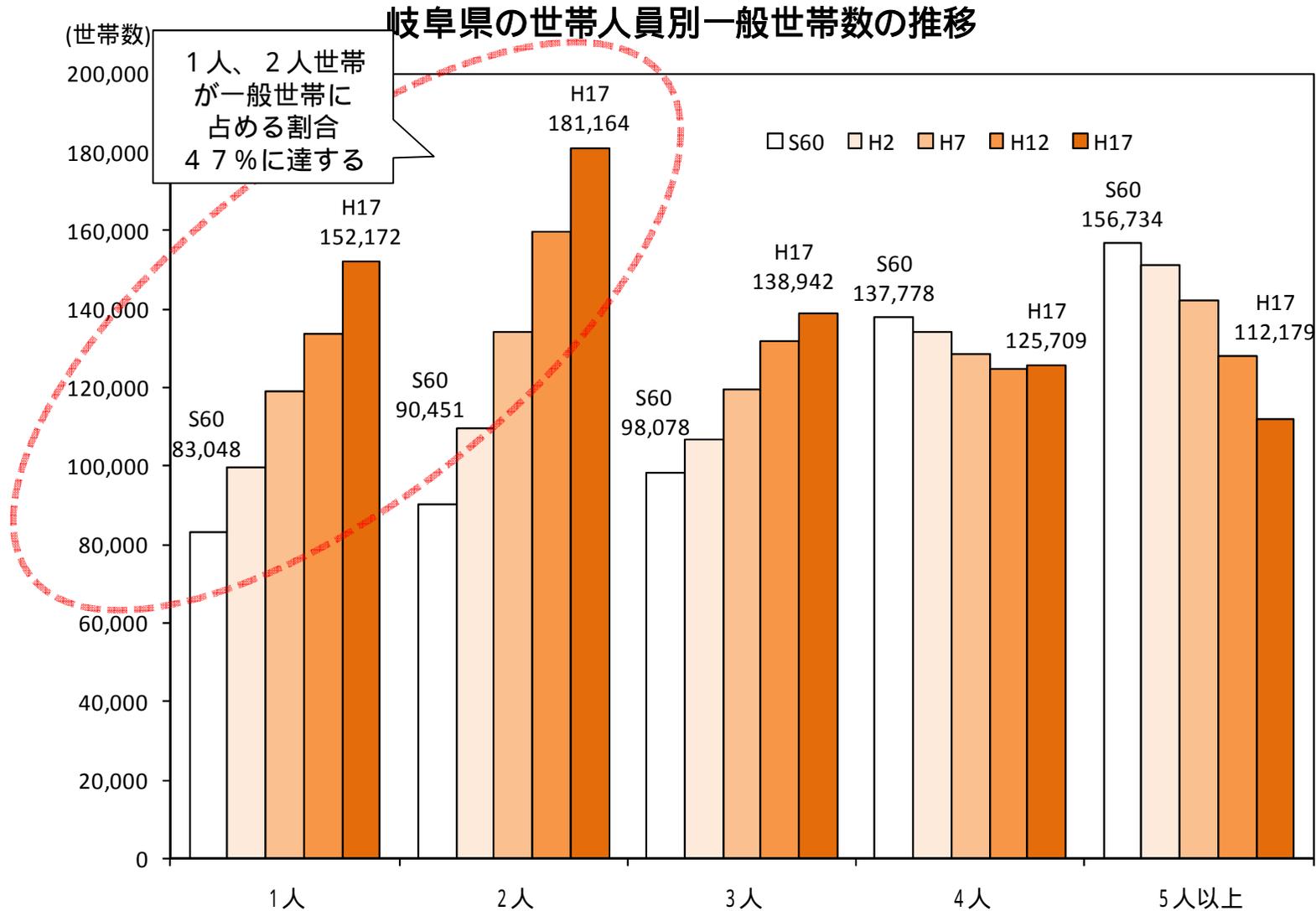
H22は速報値のため、
施設等の世帯を含む。
参考：H17の施設等世帯数1,896世帯



出典：総務省「国勢調査」による。

どんな世帯が増加したのか

4人以上の世帯が減少し、1人・2人世帯が大幅に増加
～1人・2人世帯は全世帯数の1/2を占める。20年間で約2倍に増加～

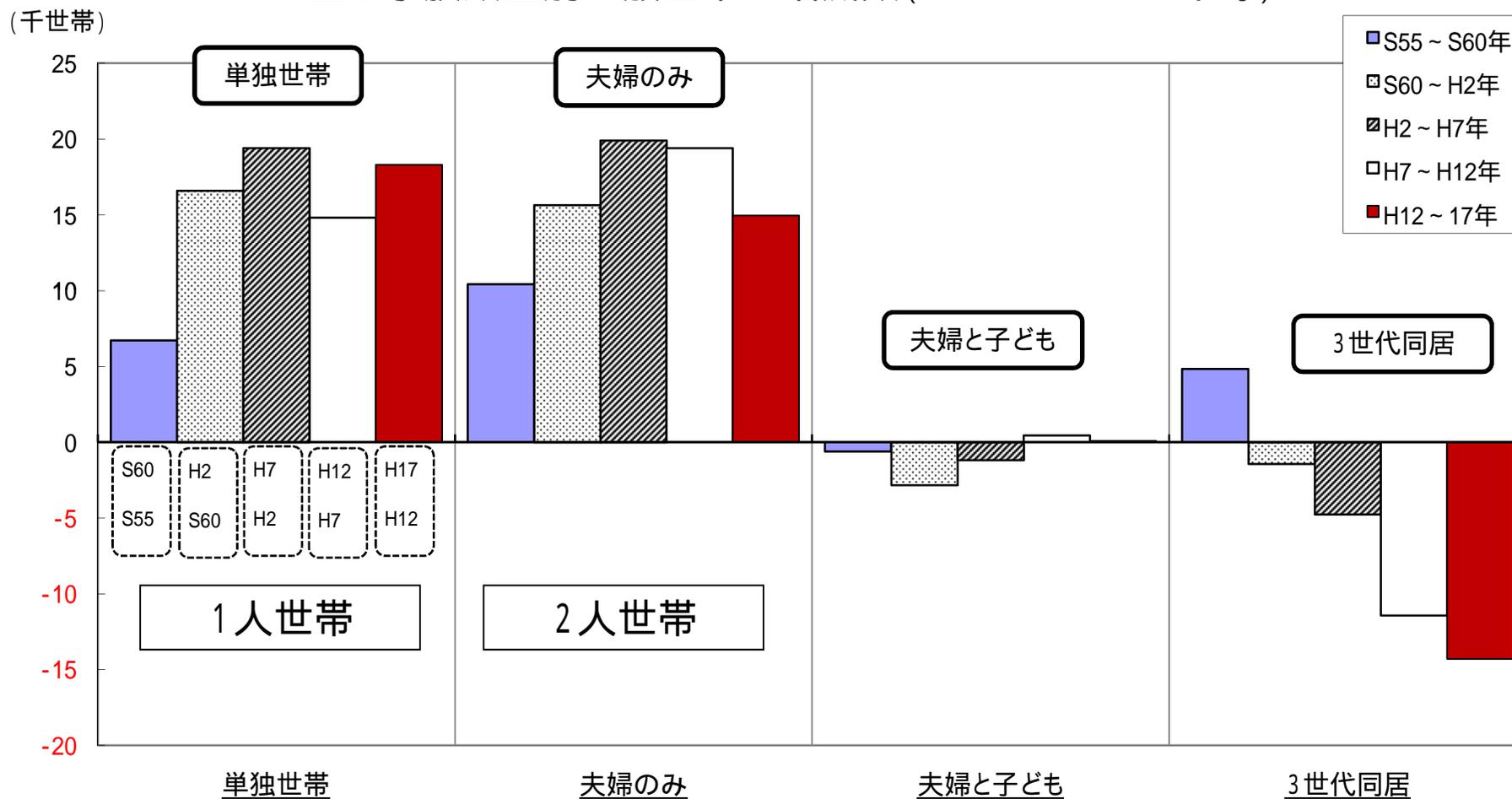


出典：総務省「国勢調査」による。

家族類型別に見た世帯増減

「単独世帯」(1人)、「夫婦のみ世帯」(2人)が大きく増加
 子どもがいる世帯は増えず、3世代同居が大きく減

主な家族類型別一般世帯の増減数(S55~H17・5年毎)



出典: 総務省「国勢調査」

注: 3世代同居は、家族類型のうち「夫婦と子どもと両親」、「夫婦と子どもとひとり親」、「夫婦と子どもと親と他の親族」世帯を合計したもの。

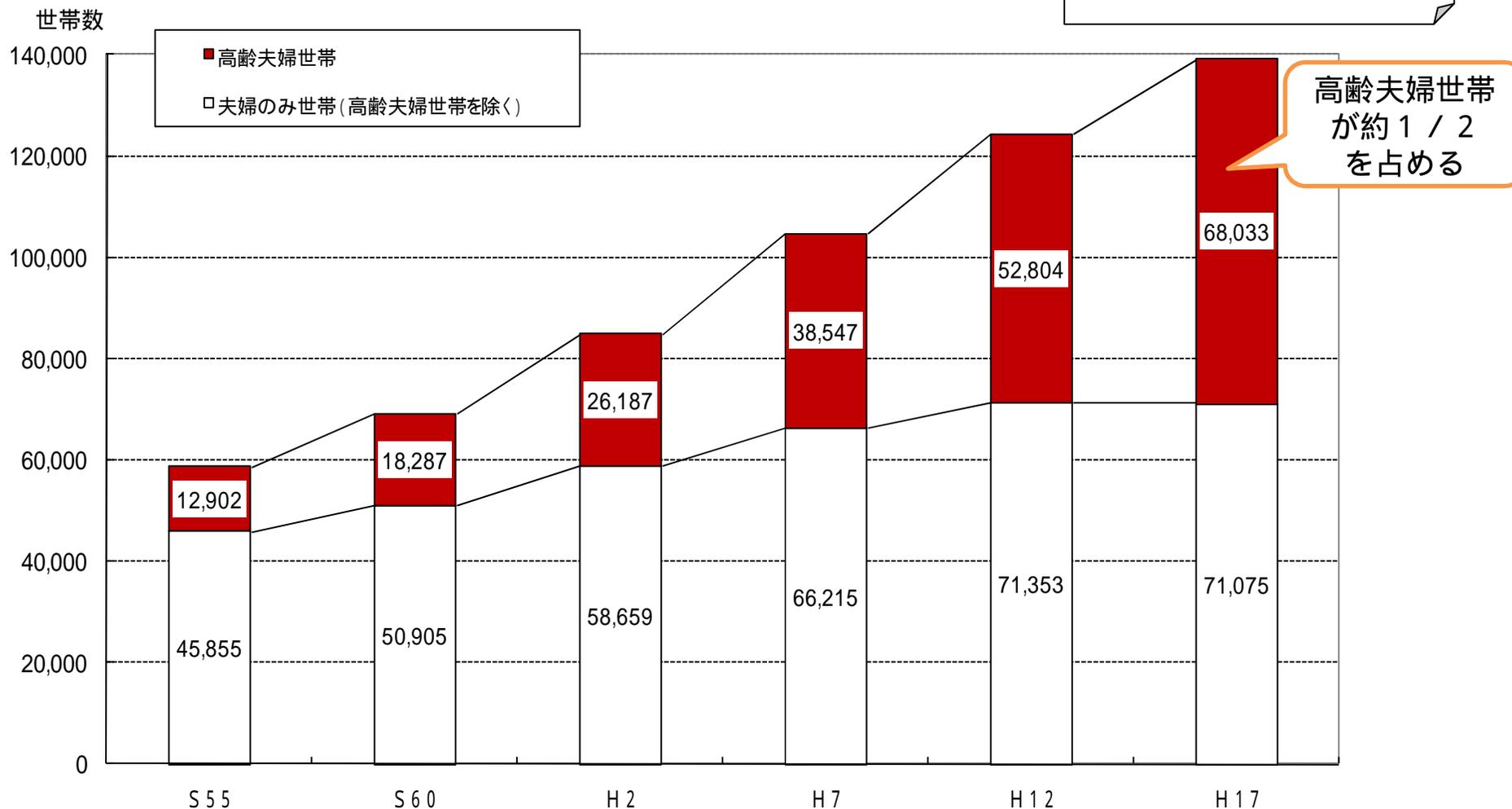
どんな「夫婦のみ世帯」が増えているのか

夫婦のみ世帯で急増したのは高齢夫婦世帯

高齢夫婦世帯・夫65歳以上妻60歳以上の夫婦1組のみの一般世帯

夫婦のみ世帯数の推移(岐阜県)

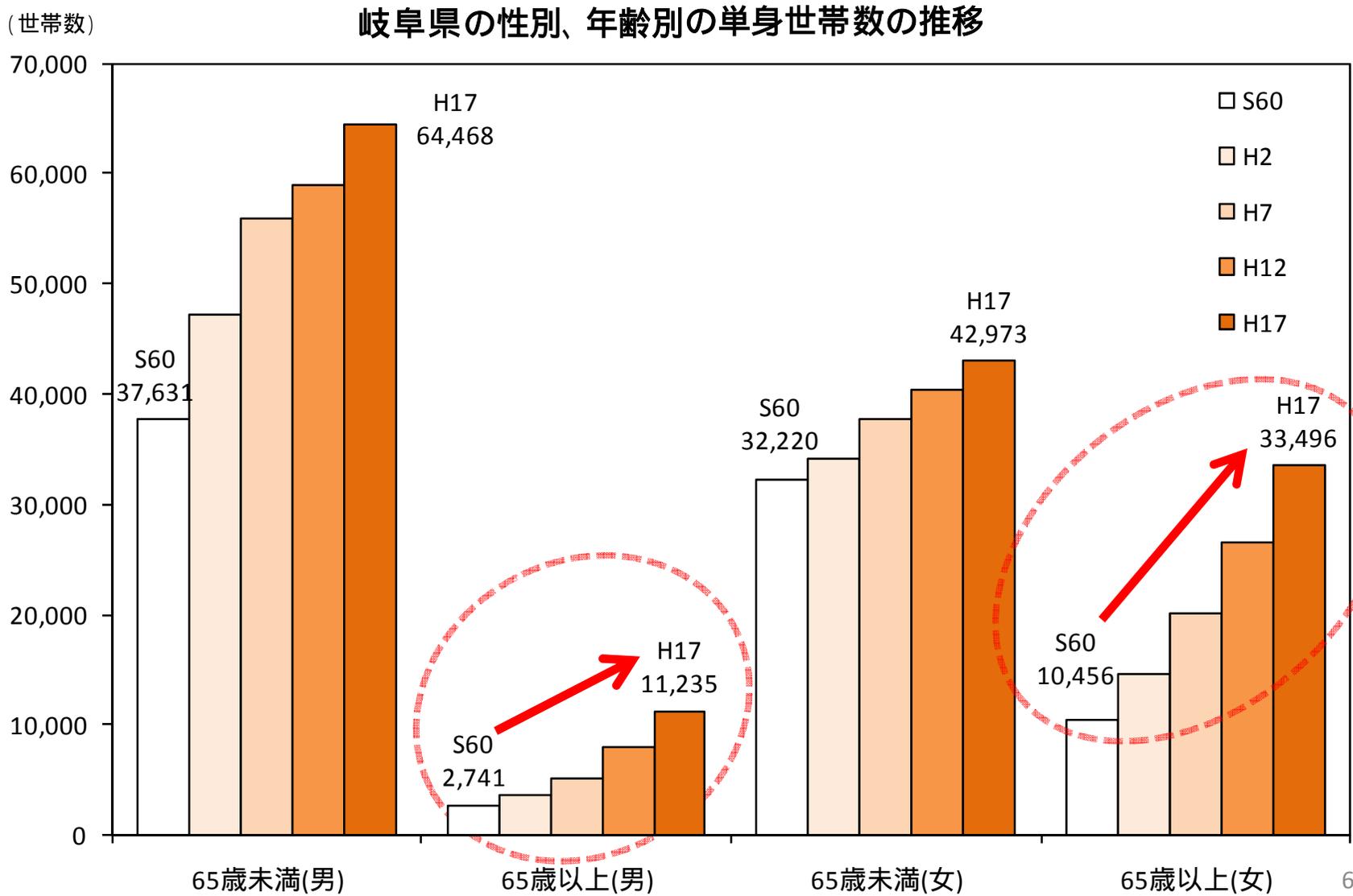
H12→H17の5年間で
15,229世帯も増加



出典:総務省「国勢調査」

どんな単独世帯が世帯が増えているのか

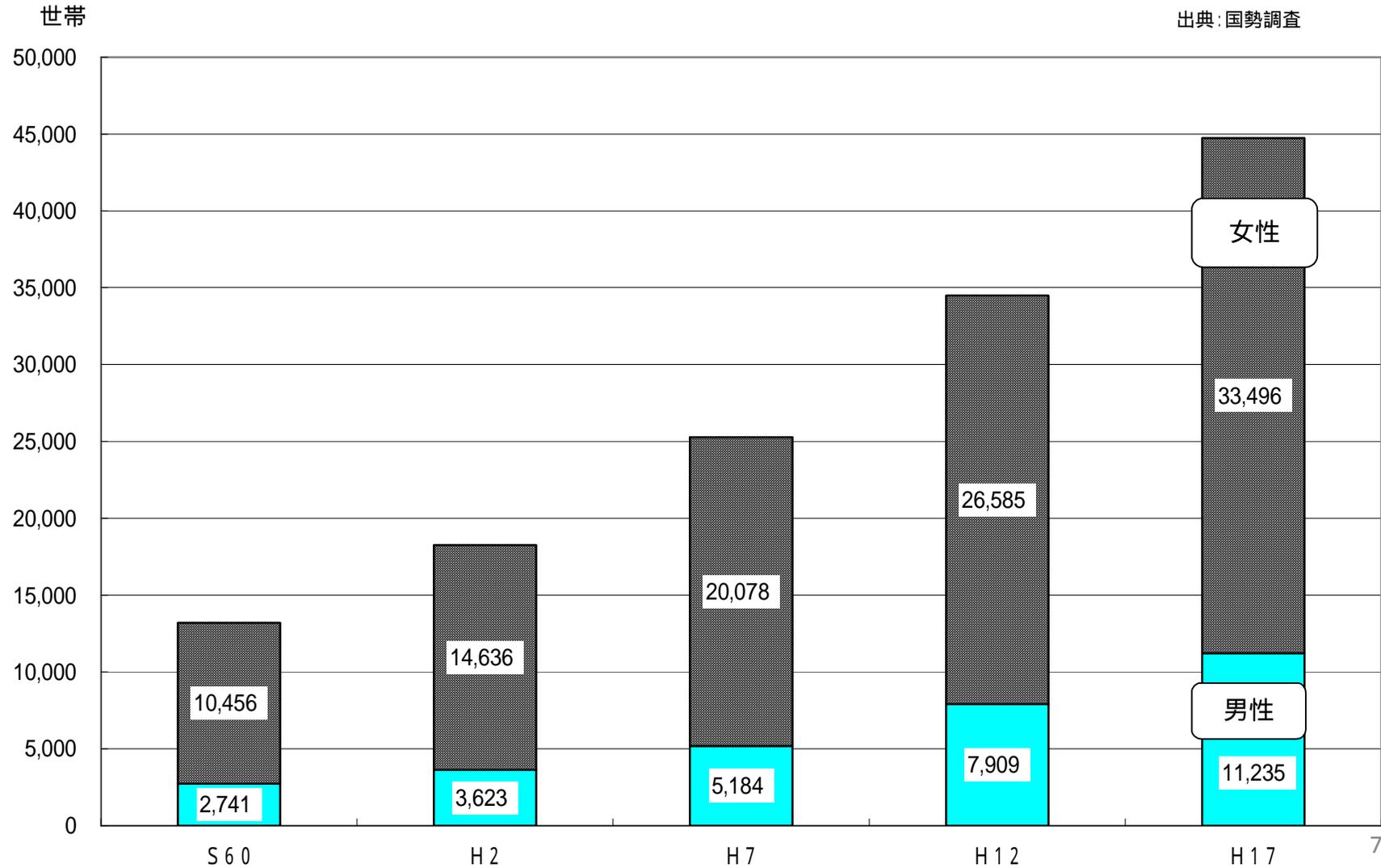
65歳以上の単独世帯の増加が目立つ(特に女性)
~ 20年間で65歳以上高齢者は女性が3.2倍に(男性は4倍)~



出典:総務省「国勢調査」による。

単身高齢者は増加の一途。女性が75%を占める

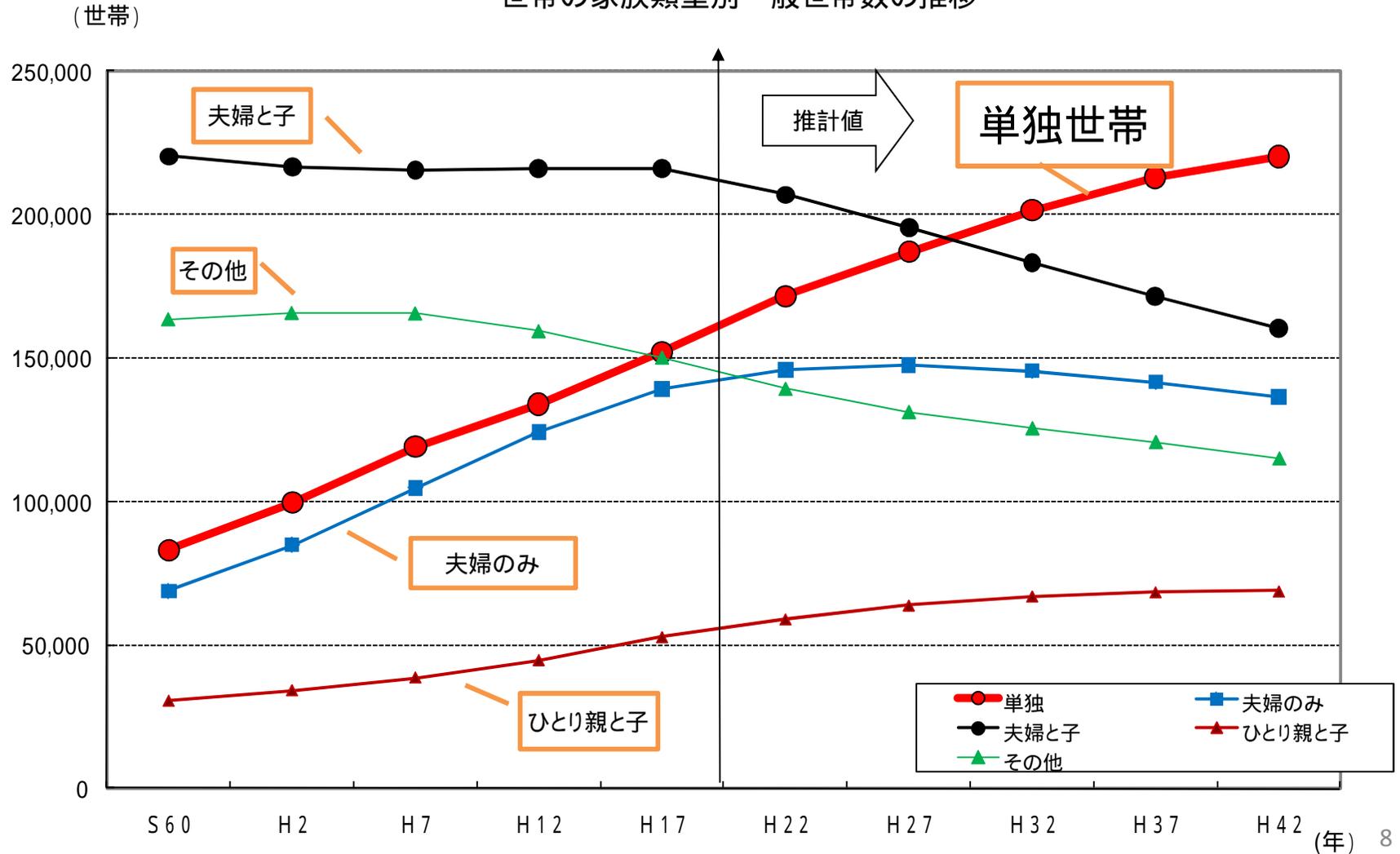
高齢(65歳以上)単身世帯数の推移(岐阜県)



将来の世帯数の見通し

単独世帯はさらに増加を続け最も多くを占める世帯に
 ~「単独世帯」は現在の「夫婦と子世帯」と同規模まで増加~

世帯の家族類型別一般世帯数の推移



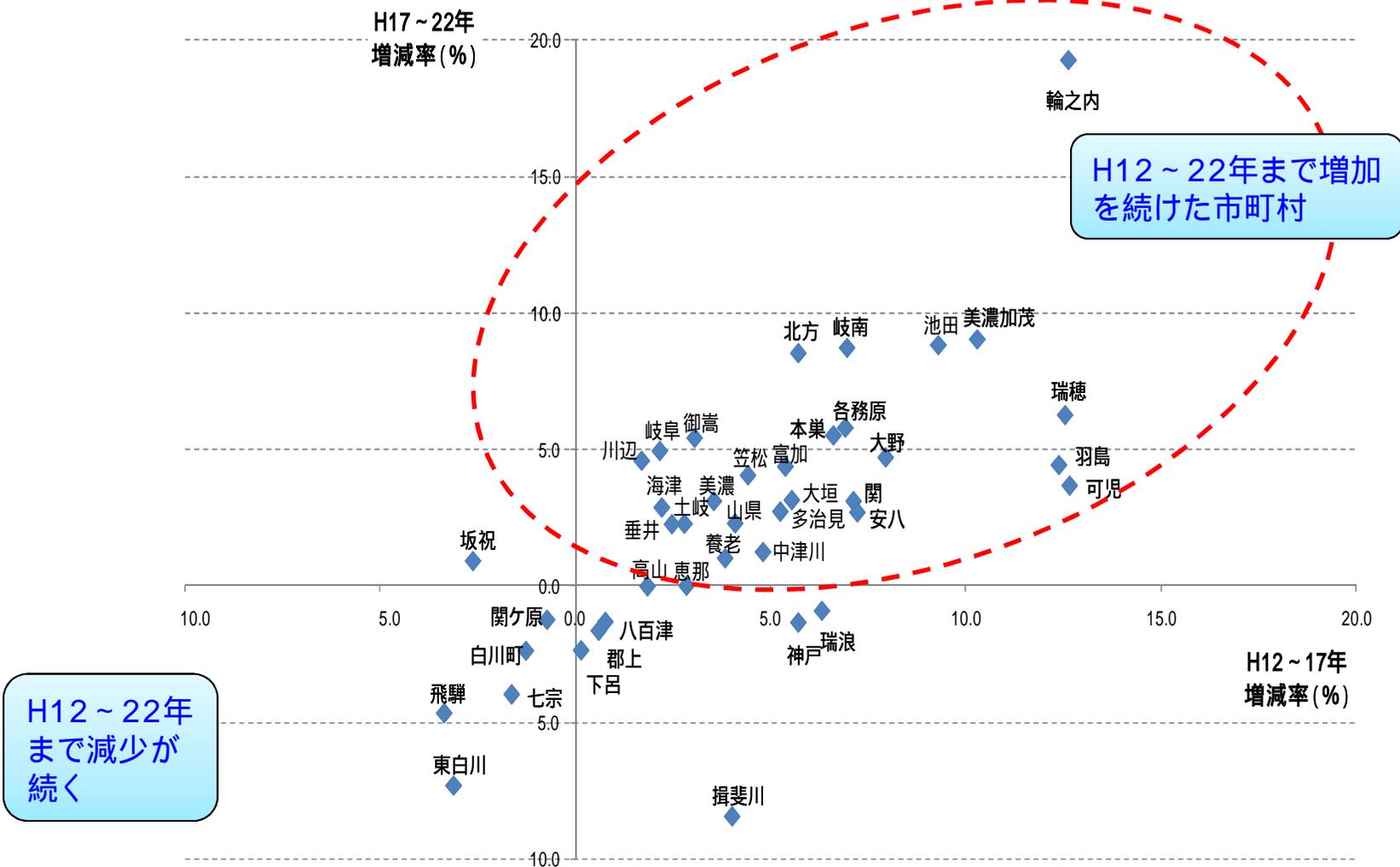
(H22以降は国立社会保障人口問題研究所推計)

市町村別に見た世帯動向

市町村別に見た世帯数の増加傾向（H12～22年）

世帯数の増加が続く市町村が多くを占める

県内市町村別総世帯数の増減率(H12～22年)

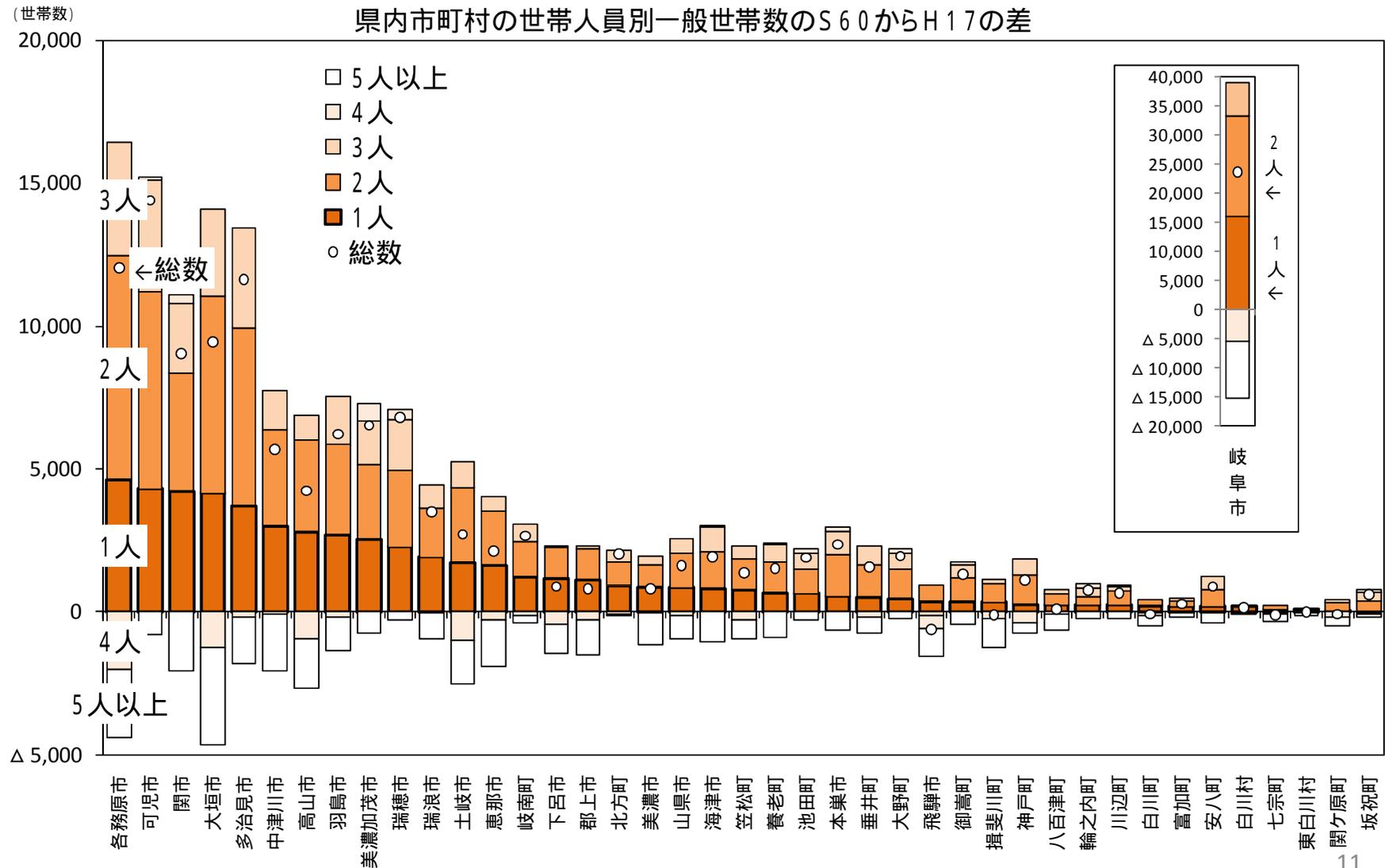


白川村は除いている。(東海北陸道工事関係者の移動の影響が大きいため)

出典:総務省「国勢調査」による。

世帯人員数別に見た増加傾向

市町村別に見ても、1人・2人世帯の増加が目立つ
 ~ 県全体と同様、増えているのは単独世帯、夫婦のみ世帯。小家族化が進行 ~



出典：総務省「国勢調査」による。

世帯構造の変化が進んでいる地域の 生活実感を聞いてみました

H23年5月、郡上市の「あるお寺」のご住職にヒアリングを実施

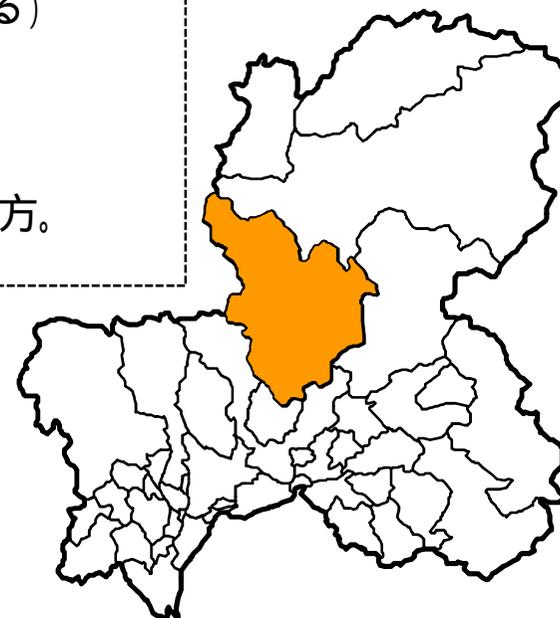
→ 郡上市の1人・2人世帯が一般世帯数に占める割合(45%)は、県全体(47%)とほぼ同じ。

< ご住職の紹介 >

地域の世帯の変容をみてきている方。(根拠となるデータもある)

地域の方(特に高齢者)の声や悩みをじかに聞いている方。

大学4年間を除いて、80年近くずっと地域で生活してこられた方。



お寺近くの人口の動向

50年間で、町内の人口は2分の1に減少

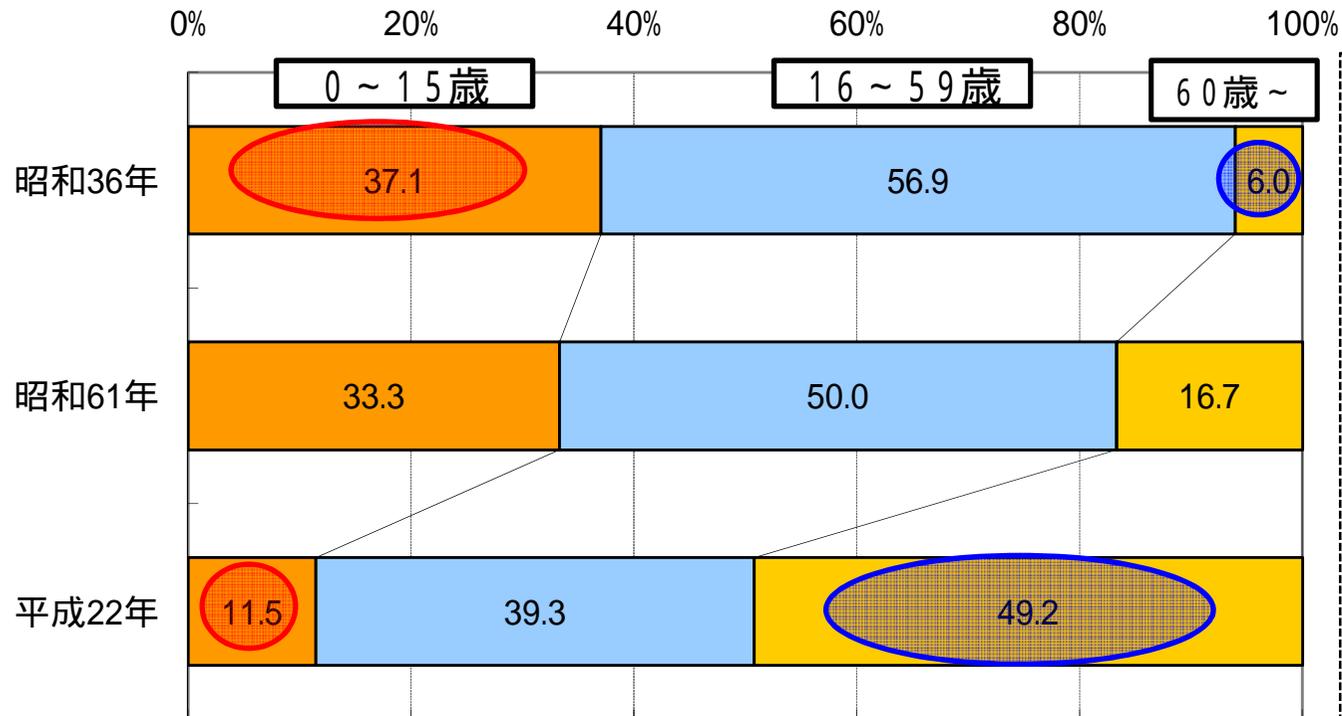
昭和36年(1961年) 約120人 → 平成22年(2011年) 約60人

子どもは1/6の10人弱に減、一方60歳以上は3倍の約30人に増

12歳以下の子ども、60歳以上の大人の割合は逆転した。

< 夏休みのラジオ体操。 お御堂にあふれていた子どもたちが、今では数人 >

郡上市 ある寺院近くの町内会 50年間の人口推移 3階級別構成比



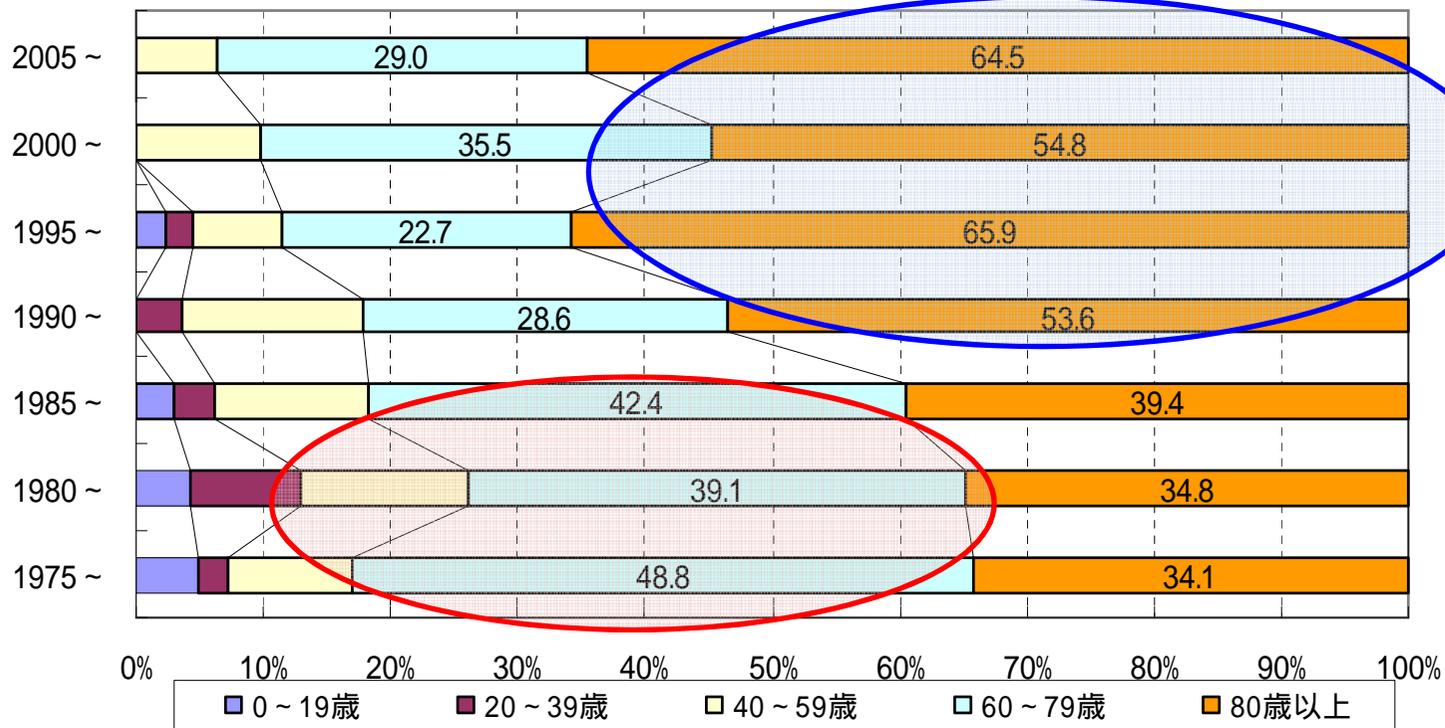
- ・50年以上夏休みに毎年ラジオ体操を行ってきた。以前はラジオ体操後にお御堂でお経を上げるときには、子ども達でお御堂が溢れていたが、今では数人の子どもしかいなくなってしまう。
- ・報恩講で出されるお斎やおやつは、子どもたちにとって大変楽しみなもので、お御堂だけでは入りきらない程の子どもが集まっていたが、今では数える程度の子どものなってしまう大変寂しい。

子どもが減る一方、お寺の行事や法要に高齢の方の参詣が増えている。

- ・子どもがお寺の行事に参加する人数は格段に減ってしまっている一方で、お寺の行事や法要に高齢の方の参詣が増えている。そのため、以前はお御堂に参られた方は正座をするのが普通であったが、高齢な方が増え足の悪い方のために椅子に座って参詣ができるようになった。

1990年以降は亡くなられる方の半数以上が80歳以上

過去帳から見た 5年毎 20歳階級別死亡者数構成比(男女計)



若い世代の流出が進み、家族が小さくなっていった

少なくなった若い人たちが、職を求めて都会に出てしまった

- ・子どもの数が減ってきたにもかかわらず、さらに困ったことはその少なくなった子どもが職を求めて都会に出て行ってしまうこと。
- ・若者が都会へ出て行ってしまう1番の理由は、就職口がないこと。就職口があれば必ず若者はこの地域に残るはず。若者は、この地域が嫌いだからではなく、生活しようにも就職口がないことから出て行ってしまう。農業、林業ではなかなか安定した現金収入が見込めないことも理由。

家族の人数も少なくなり、今では1人か2人の家族が多くなった

- ・私の兄弟は6人いるが、昭和初期にはそれが当たり前であった。ところが、私の子どもを考えても2人しかいない。その2人の子どもも都会に出て行ってしまっている。このお寺でもこの状況なので、他の家庭でも状況は同じで子どもの数が少なくなっていく一方である。子どもが少なくなれば、家族の数も少なくなり、法事に集まる家族も少なくなっていく。
- ・したがって、この地域に残るのは年寄り夫婦だけである。夫婦揃っていけばよい方で、死別して1人になってしまっている家庭もある。このような単身世帯になってしまうと、都会へ出て行った子どもが単身の親を老人ホームに入れてしまい世帯が消滅してしまうところもある。
- ・職があって長男が戻ってきたとしても嫁がいないのが現状で、3人で暮らしている世帯もある。

家族が小さくなった結果、どんな変化があったか

昔から伝わってきたお祭りを行うのが難しくなった

- これまでは、たくさん子どもや若い世代の人たちがたくさんいて、お祭りのいろいろな役をやらせてもらったのだが、今ではその役をやらせてもらえるだけの人数が揃わずお祭りを何年も行ってない。

除夜の鐘をつく子どもの数が少なくなり、スキー客がつくことも

- これまでは近く子どもたちがにぎやかで、子どもたちや地域の人で行列をつくって除夜の鐘をついていた。ところが、子どもの数が激減してしまい、スキー客が立ち寄ってつくようになり、今ではスキー客で行列ができるようになった。

檀家さんの結婚式に呼ばれることが少なくなった

- 檀家さんの結婚式には必ず出席をしていたが、最近は結婚式自体も少なく、呼ばれることもほとんどなくなってしまった。

法事に集まる親族や地域の方が減り、親族や地域の関係が疎遠になった

- 法事には、以前（20～30年ほど前まで）は小さいお子さんからお年寄りの方まで多くの方が集まり、とてもにぎやかであった。この場では、お年寄りから、色々なしきたりを学んだり、なくなられた方の生き方を聞いたりなど、大変親族の絆が深まる場であった。
ところが、年々法事に集まる親族が少なくなっているのは大変寂しいことである。
- 今までは、法事は3回忌、7回忌、13回忌、17回忌・・・と行うのが慣例であったが、最近はよく行われて3回忌まで、中には1周忌だけの家庭もある。

親族、地域の協力だけで葬儀を行うことが難しくなった

葬儀をとり行う中堅世代にそのしきたりが伝わっていない

- ・ 自宅や公民館で葬儀を出そうとしても、葬儀のしきたりや段取りの取り方が伝わっていないため、手間が全て省ける葬儀場（セレモニーホール）に任せてしまっている。

お年寄りだけでは、葬儀・法要を行う段取りができなくなった

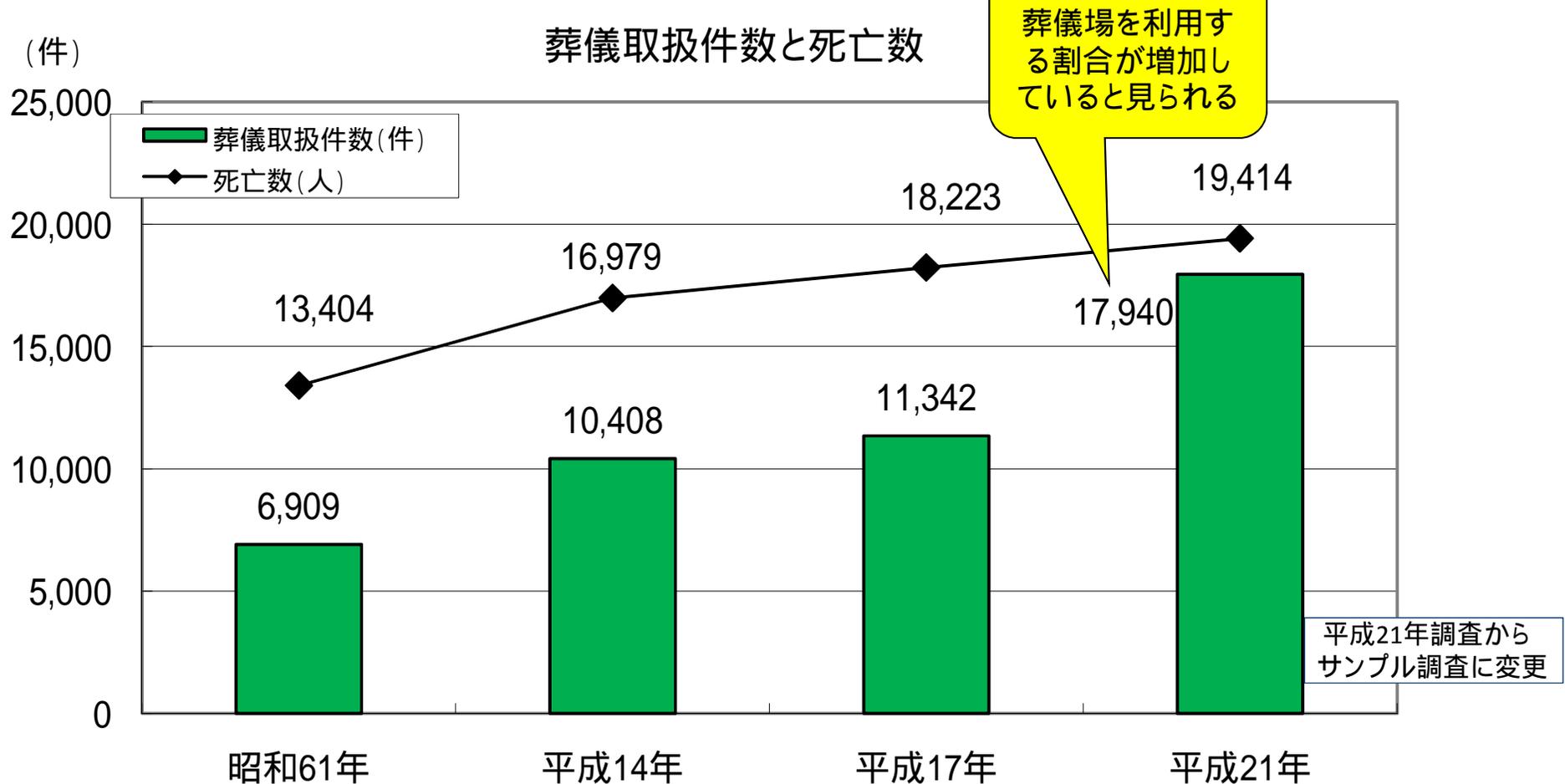
- ・ 法事を行おうとしても、子どもたちは全員出て行き、お年寄りしか残っていない。お年寄りでは、なかなか法事を行う段取りができない家庭もある。
- ・ 葬儀についても同様で、お年寄りだけでは、自宅で行う段取りをすることが難しい。そのため、斎場をお願いをしてしまうことがほとんどになった。

ほとんどの葬儀は、葬儀場（セレモニーホール）で行われるようになった

- ・ 葬儀を自宅で行うためには家族や地域の方の力が必要で簡単にはできない。ところが、斎場で行えばその手間が省けるため、ほとんどの家庭は葬儀を斎場で行うようになった。
- ・ 以前の葬儀は自宅や寺で行うことが多かったが、最近はほとんどが斎場で行われる。大変便利になった反面、家族や地域の絆が薄れていく気がして残念。特に、自宅で行う場合は、地域の方の力が必要となり絆が深まる場であるが現状は大変難しくなっている。

葬儀場の現状をみてみると

葬儀場の利用者は確かに増えている
取扱件数は昭和61年と比べると2.6倍に大幅増

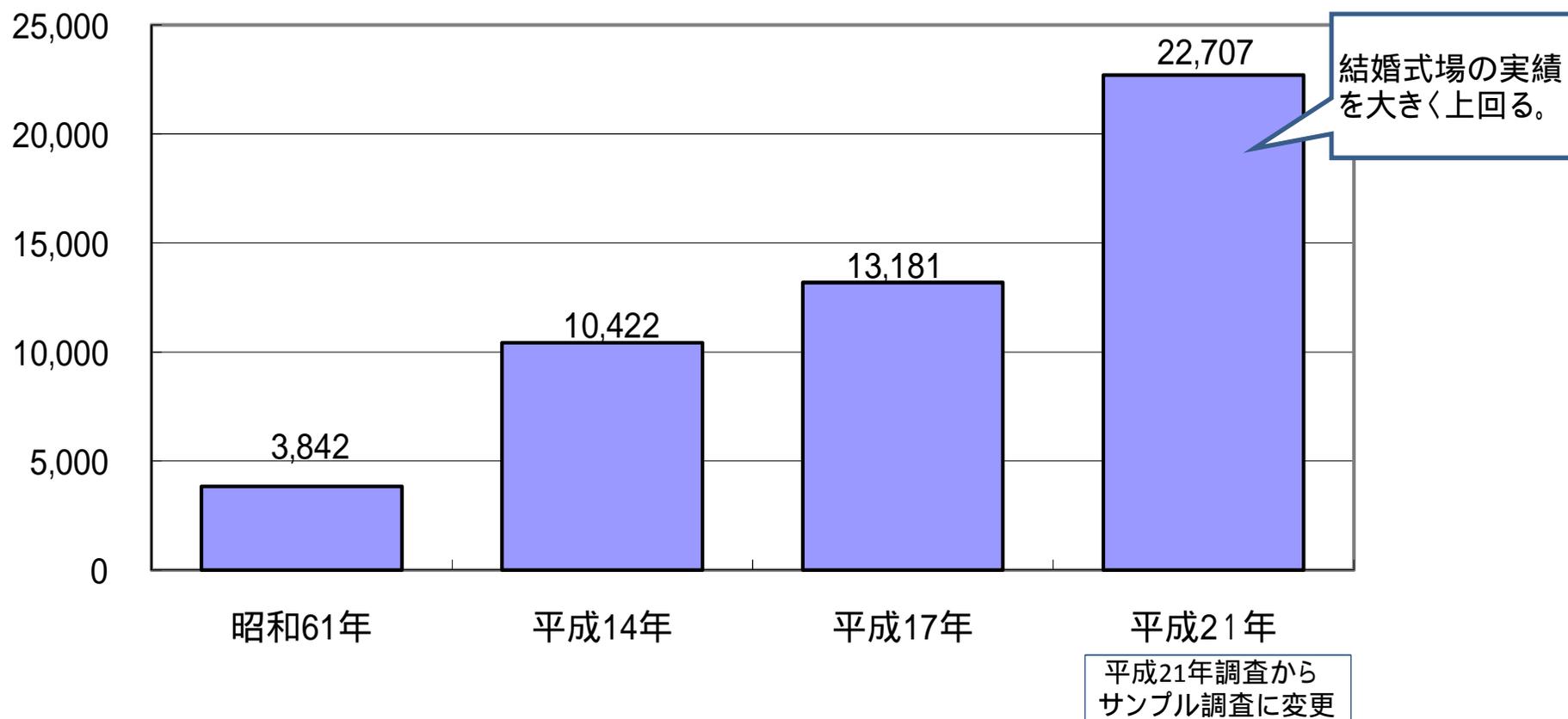


葬儀取扱件数の増加を反映し、売り上げ高も大幅に増加 ～ H21年の年間売上高は、約230億円(S61年の約5.7倍)～

全国のH21年間売上高は、約1兆6千億円
(S61年の5.1倍)

単位:百万円

葬儀場 岐阜県 年間売上高

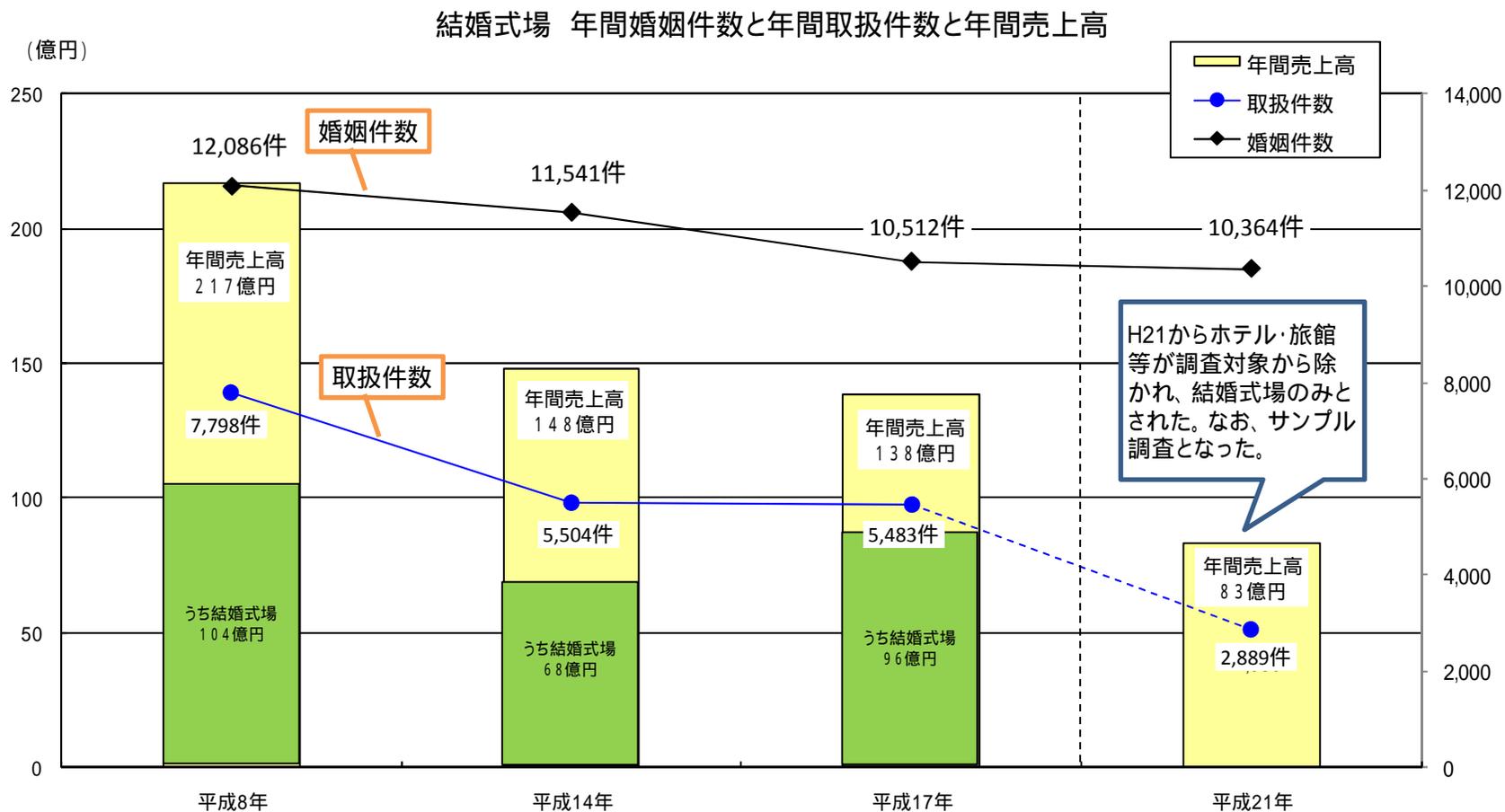


参考：一方、結婚式場の現状は

取扱件数、婚姻件数、年間売上高とも減少の一途

H17年の年間売上高は、138億円。(平成8年から36.4%減)

全国の年間売上高は、8911億円。(平成8年から33.4%減)



H21年から調査方法が大きく変更。

今後の研究の取り組み（人口動向研究部会） ～世帯動向の詳細な分析と将来の世帯数を推計～

国勢調査を用いて世帯動向を詳細に分析し、報告

- < 主な分析内容 > H22国勢調査第一次基本集計は10月公表予定
- 世帯主の年齢、世帯人員別に見た世帯数の動向 3世代同居世帯の動向
 - 核家族世帯、夫婦のみ世帯の動向(世帯主の年齢別等)
 - 配偶関係別、年齢別にみた単独世帯の動向 高齢者世帯の動向 など
- 本日の藤森先生のお話も十分に活かして分析を進める

将来の世帯数の推計

世帯数の将来推計は、今年度行う「県の将来人口推計結果(2010～2040年まで)を基にして実施

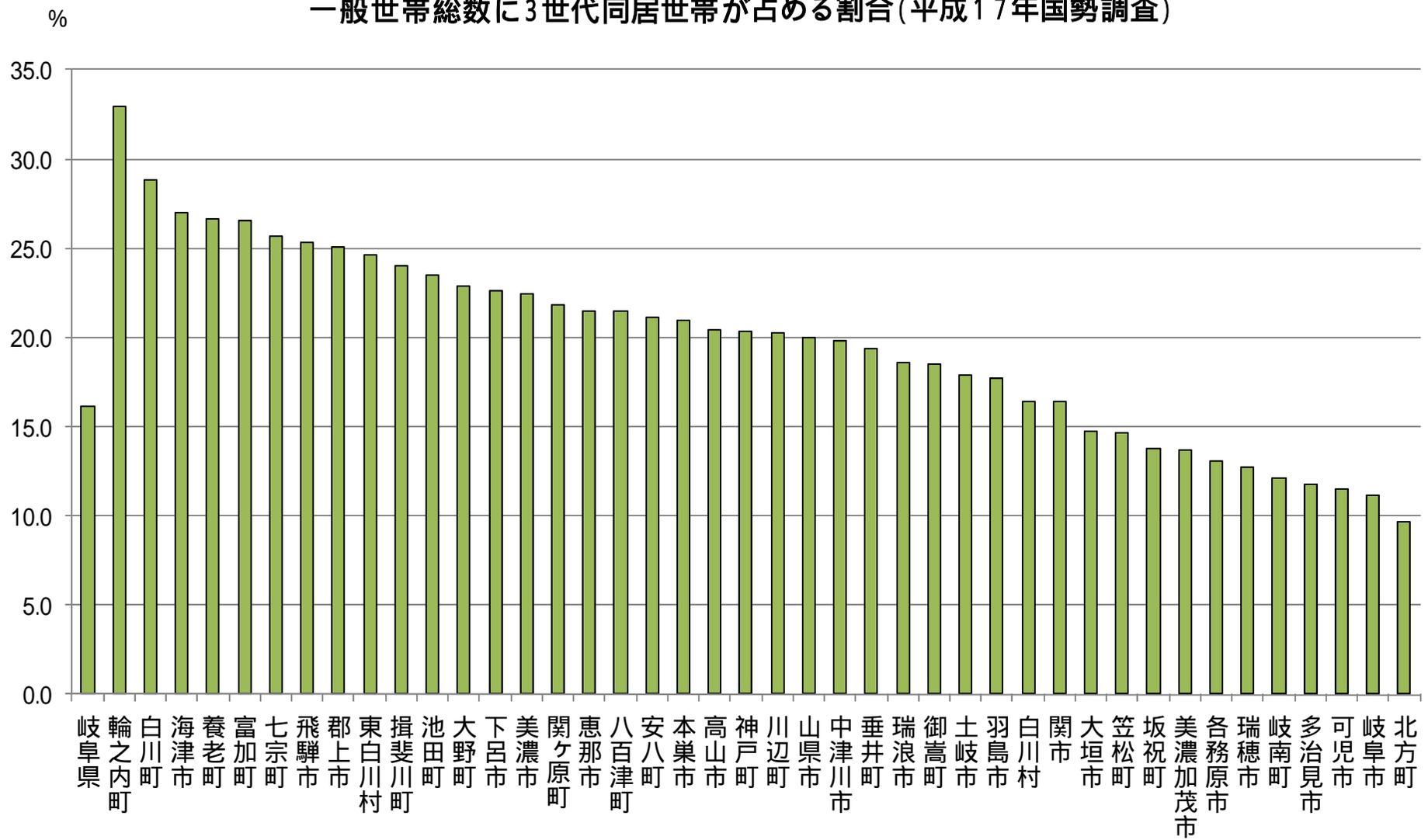
◆ 今後の予定

- 10月 国勢調査第一次基本集計公表、結果の分析、条件設定のスキーム作成
- 11月 アドバイザーとの意見交換
国勢調査分析結果を政策研究会へ報告(発表)
- 2月上旬 将来人口推計結果の公表(政策研究会での発表)
その後、世帯数の将来推計作業の実施(年度内公表が目標)

以下は参考資料

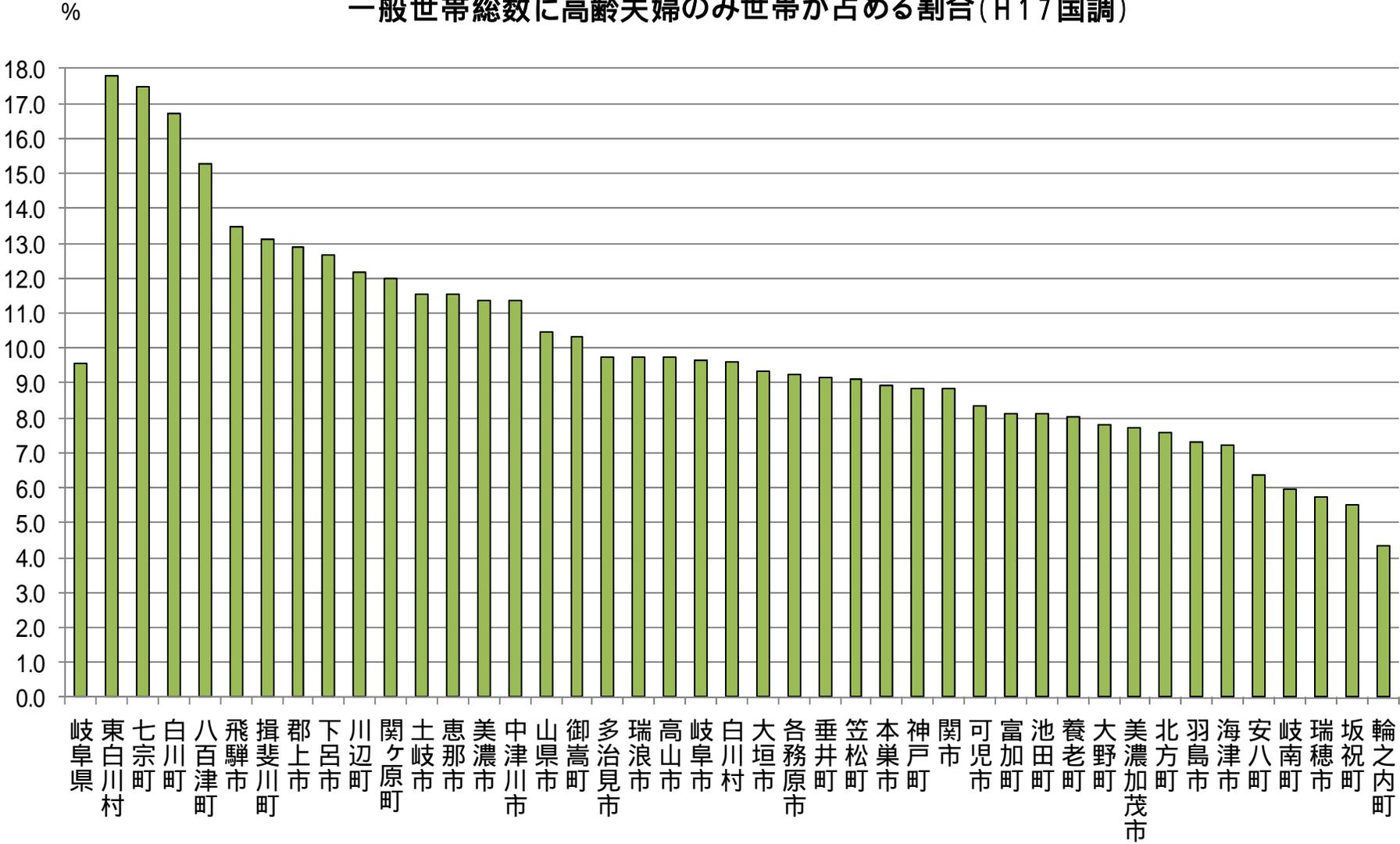
参考

一般世帯総数に3世代同居世帯が占める割合(平成17年国勢調査)



参考

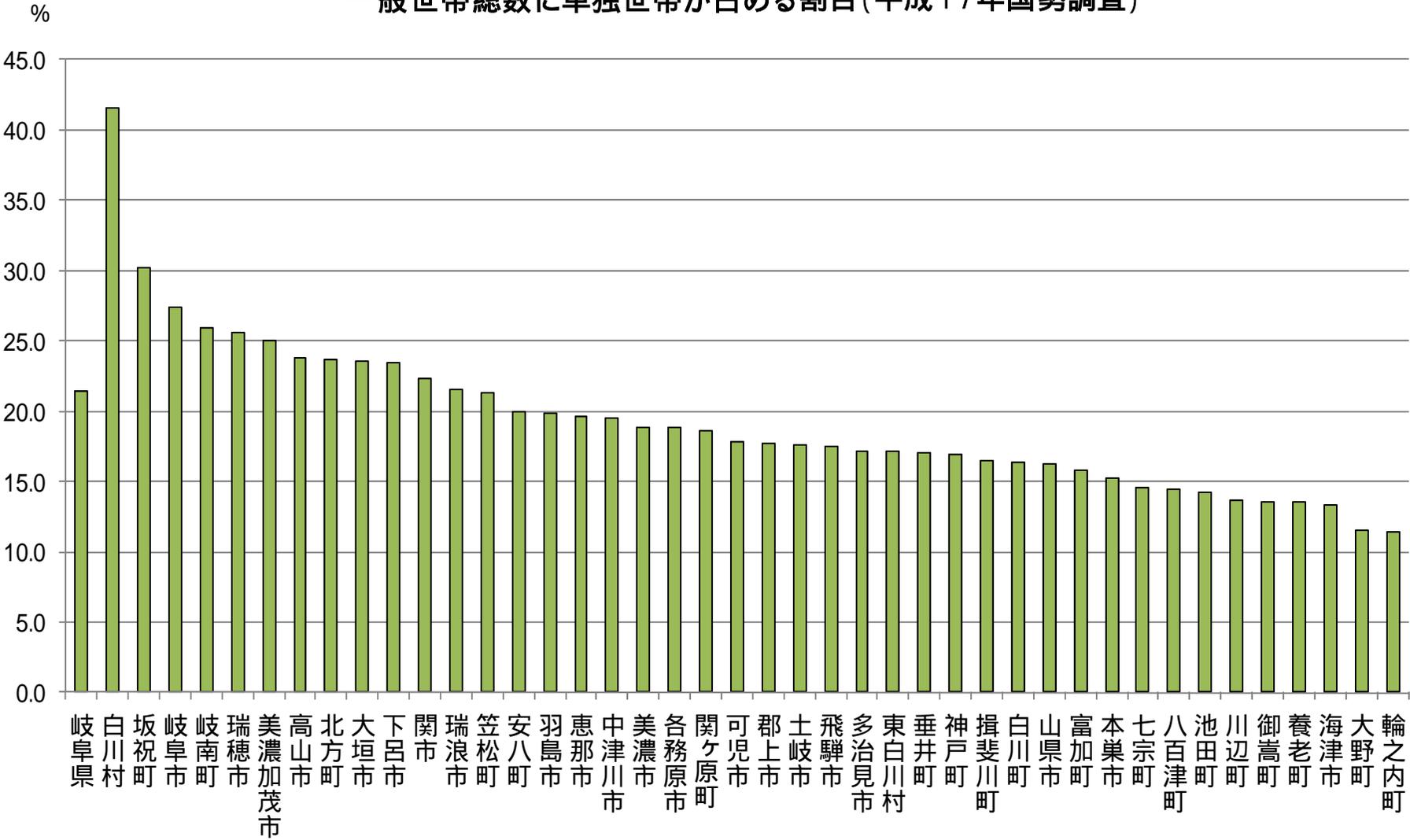
一般世帯総数に高齢夫婦のみ世帯が占める割合(H17国調)



高齢夫婦のみ世帯(夫65歳以上、妻60歳以上の世帯)

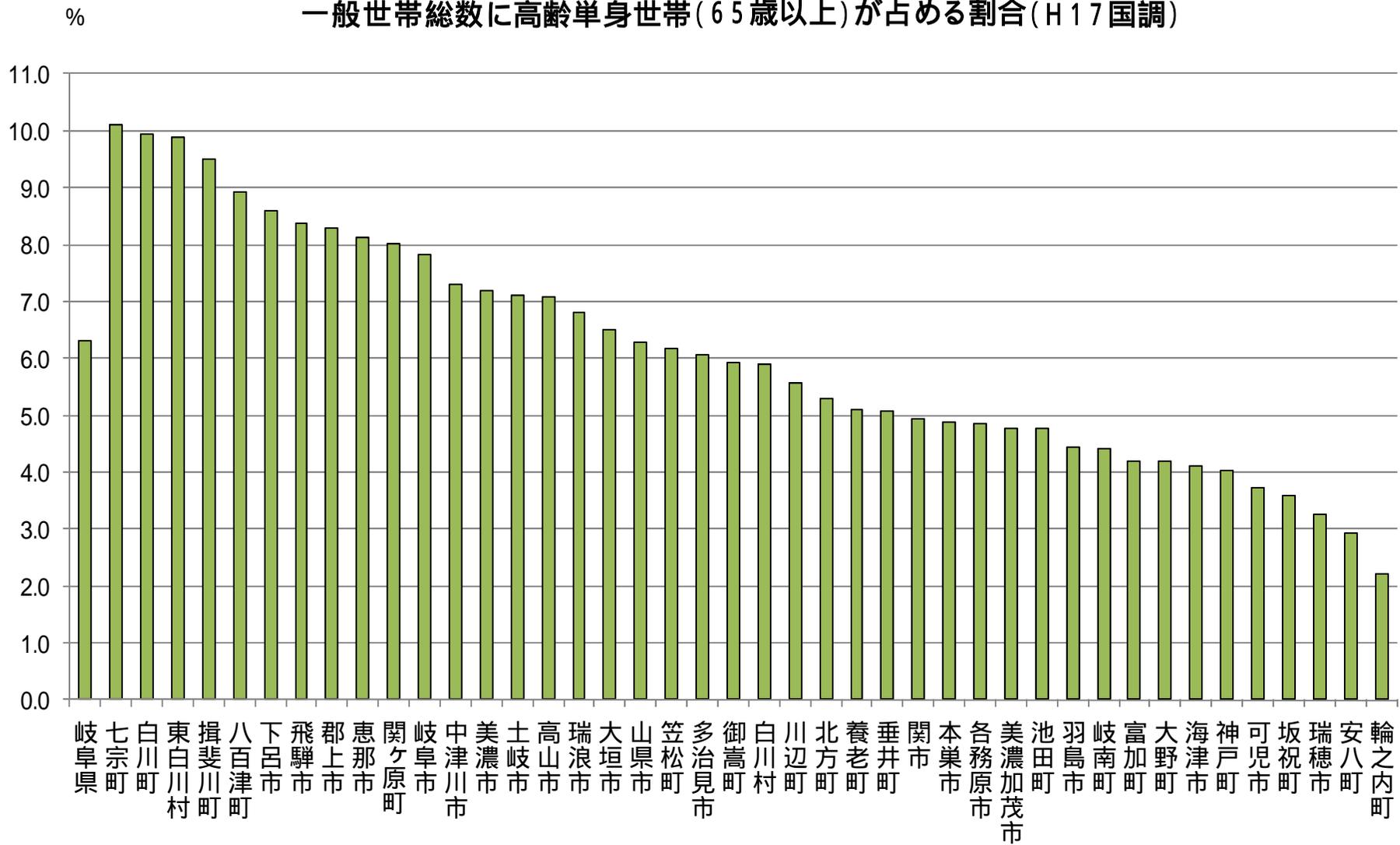
参考

一般世帯総数に単独世帯が占める割合(平成17年国勢調査)



参考

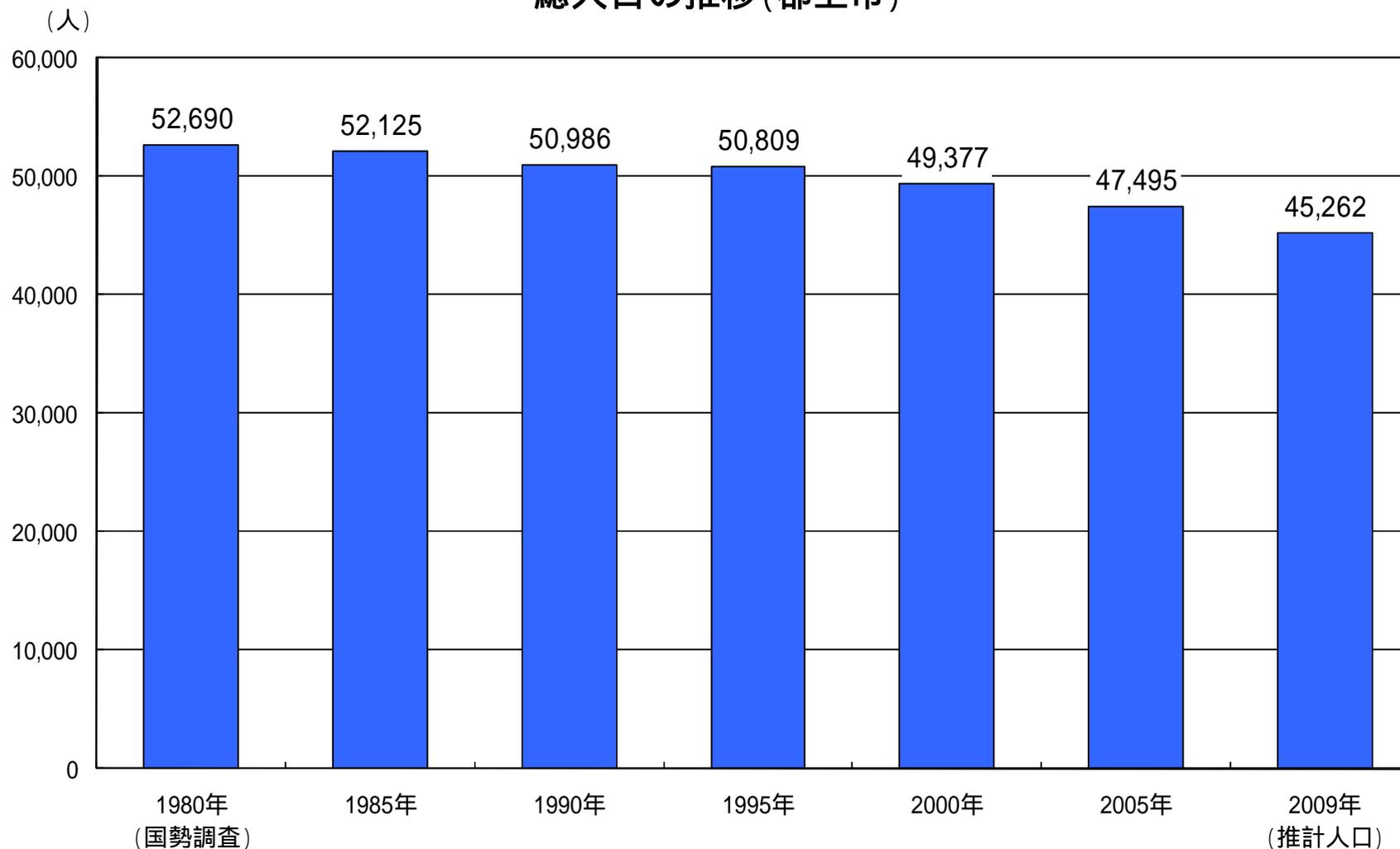
一般世帯総数に高齢単身世帯(65歳以上)が占める割合(H17国調)



人口は減少が続いている

➤人口順位：県内14位 県人口に占める割合：2.69%（1980年）→2.17%（2009年）

総人口の推移(郡上市)



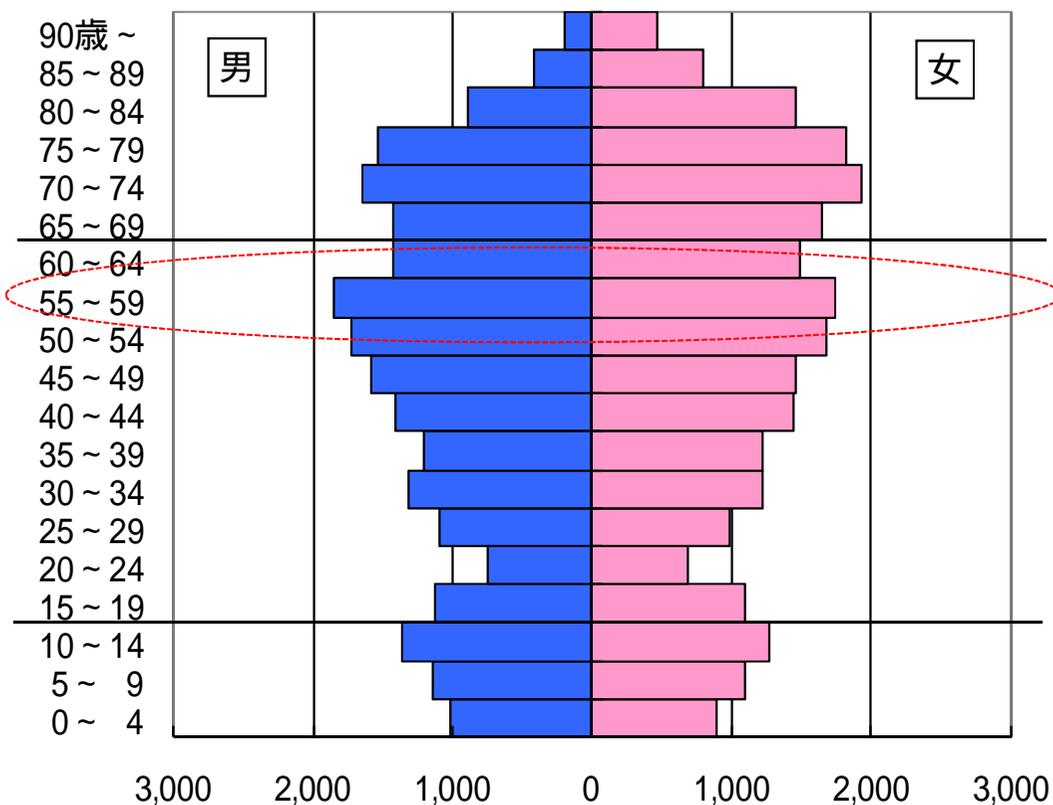
出典：総務省「国勢調査」、岐阜県「岐阜県人口動態統計調査」(10月1日現在推計人口)

参考：郡上市の概要

団塊世代や高齢層が多く、今後急速に高齢化が進む
20～24歳が特に少なく、子どもも減少

➤高齡化率（老年人口割合）：14.4%、5位（1980年）→30.0%、5位（2005年）

2005年人口ピラミッド(郡上市)



| | 人口(人) | 構成比(%) |
|--------|--------|--------|
| 総人口 | 47,495 | 100.0 |
| 0～14歳 | 6,752 | 14.2 |
| 15～64歳 | 26,507 | 55.8 |
| 65歳以上 | 14,236 | 30.0 |

< 岐阜県全体の人口構成 >

- ・ 0～14歳：14.5%
- ・ 15～64歳：64.4%
- ・ 65歳以上：21.0%

< 構成比の県内順位 >

- 年少人口 23位
- 生産年齢人口 39位
- 老年人口 5位

数値の大きい順

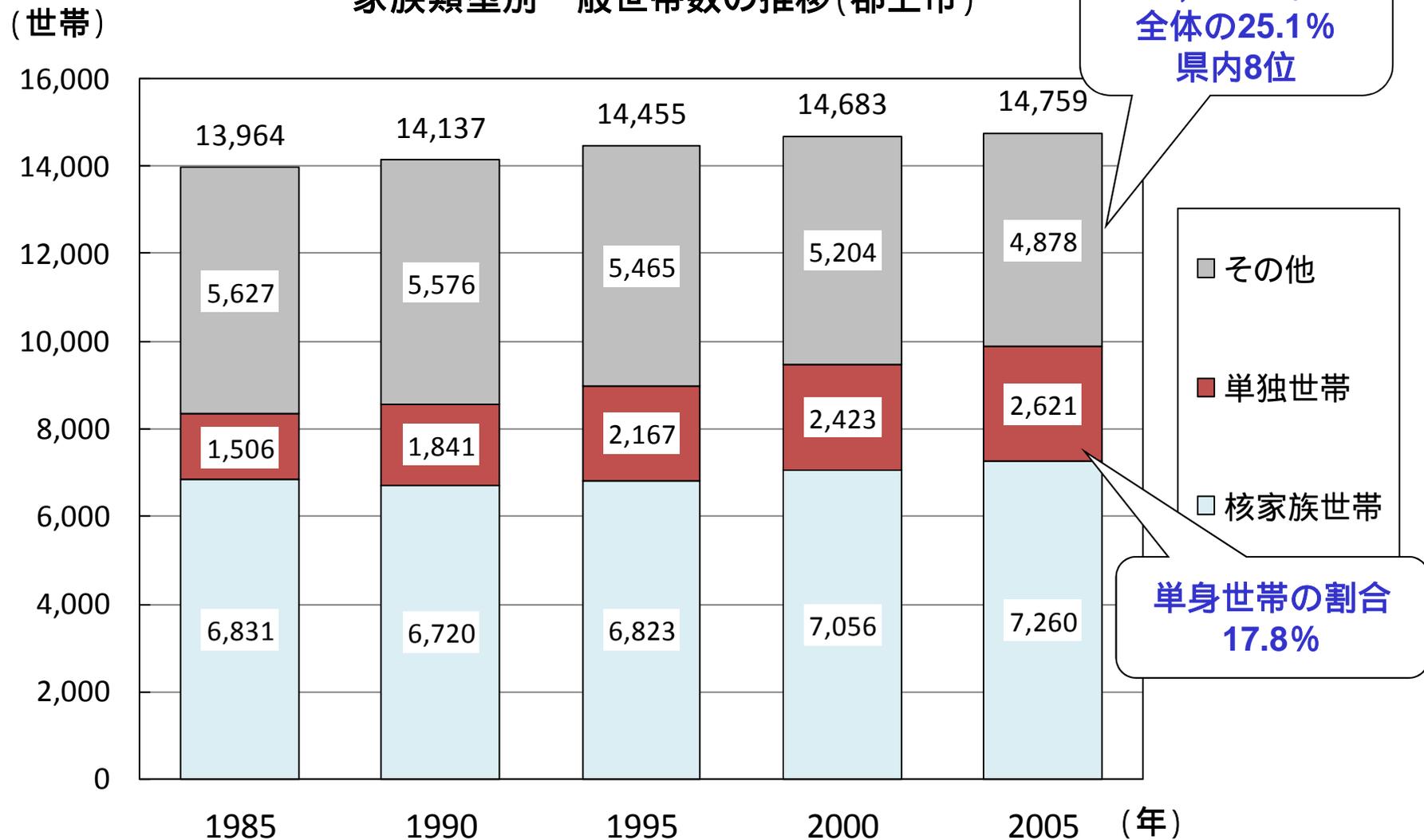
出典：総務省「平成17年国勢調査」

(人)

核家族や単独世帯は増加傾向

▶平均世帯人員：3.67人（1985年）→3.14人（2005年 県内17位）

家族類型別一般世帯数の推移（郡上市）

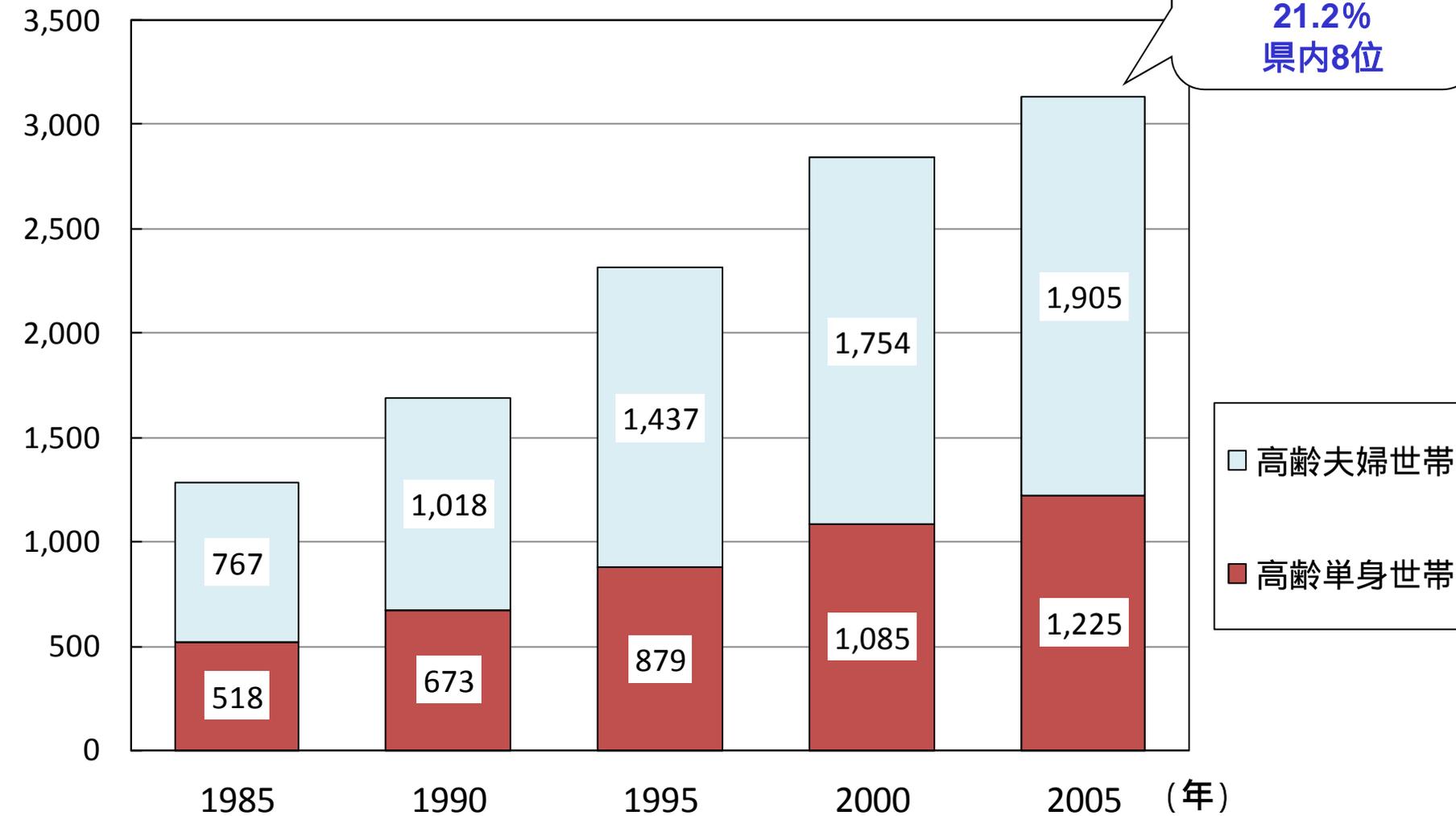


出典：総務省「国勢調査」

高齢の夫婦や高齢単身世帯が大きく増加

高齢夫婦・高齢単身世帯数の推移(郡上市)

(世帯)



出典：総務省「国勢調査」

注：高齢夫婦は夫65歳以上、妻60歳以上の夫婦のみ世帯（一般世帯）

高齢単身は65歳以上